



スクールサポーター
(臨床心理士)
小林 真理

ポップコーンの
ユンモーション

軽井沢町には「スマイル・ステップ・センター」という名称の中間教室があります。地域によっては適応指導教室という場合もあります。学校に行くことができない状態にある子どもが、家から一歩出て日中を過ごし、その子どもペースで学校との距離を縮めていくための、学校と家庭との中間的な居場所として設置されている教室です。今回はそこに通いながら、徐々に学校と自分の気持ちに折り合いをつけてきたAさんのケースについて紹介します。

ンションと自分の違いがあった、ついていけなかった。みんなのことを好きとか嫌いという白黒つく感じではない、グレーの状態が4月から続いていた」と話してくれました。そしてこの時のことを「ポップコーンがはじけているときに、自分だけどうもろこしのまんま。これに気づくまで踏ん張ってたけど、気づいたら踏ん張るのが疲れた」と振り返り、「休んでみて自分が無理してたんだ、と気づいた。それで無理しないためにどうしたらいいか、と改めて『なんで自分が休んでいるのか』というのを疑問にして考えるようになった」と話してくれました。

休み始めの頃は、周りの評価や「いじめられてるんじゃないか」のようなうわさがあった、「そうじゃないのにな」って思いながら、学校に来ることが普通、普通じゃないことが悪いこと、のよう、休んでいる罪悪感があった。けどですっげえ無理してた。自分で半分死にかけながら（学校に）来ていた。でも「自分の当り前が、人の当り前ではない」ということに気づいた。たとえば、自分は忘れ物をしたら切腹くらいの気持ちで忘れ物をしないようにしていたのに、そうじゃない人がいてショックだった。集中したい時に話しかけられて「怒ってる？」と誤解されて、それに「そうじゃないのにつて」気を遣ったり。それで自分がきつくなってきた。で、そうやって考えてきたら、自分の当り前で他人に対する期待感を持つのはやめよう、って思えるようになって「生きやすさ」を手に入れた。こう話してくれました。Aさんの気づきは、Aさんが生きていくうえでとても大事なもので、学校を休んでいたとはいえ、その休みにしてもとても重要な意味があったといえるのではないのでしょうか。自分と人のちがいに気づいて認め合っていくことは、誰にとっても大切なことです。置かれている状況の違和感をポップコーンに例えるAさんのセンスはみんなが真似できることではありません。それぞれが生きていくうえで大切なことに気づくには、時に時間が必要なこともあります。何かうまくいかない、と感じた時には、そこにどんな意味があるのか、を考えてみるのもいいかもしれません。

※本稿については、Aさん、ご家族の了承を得ています。

図書館コーナー

◆中軽井沢図書館 イベントのご案内

◎青木館長朗読会

「美しい村(3)」より

堀 辰雄 著

フルート奏者

遠藤尚子 氏

とき 6月10日(土)

14時から

◎ちいさなおともたちの

おはなしの会

とき 6月12日(月)

10時30分から

☆当日、保健師による乳幼児相談も行います。

◎おはなしツリーによる

おはなしの会

とき 「あめふりも楽しいね」

6月18日(日)

10時30分から

◎図書館友の会

「図書館研究会」

とき 「未来の図書館像」

6月21日(水)

13時から

◎実験劇場

大人向けの英会話

とき 「私の好きな本」

6月21日(水)

15時から

新しい本が入りました!

暗手 (アンシュ)	馳 星周 著
団塊の後 三度目の日本	堺屋太一 著
母の記憶に	ケン・リュウ 著
社交不安症がよくわかる本	貝谷久宣 監修
おさるのこうすけ	武田美穂 作・絵

※図書館のホームページで蔵書検索ができますので利用してください。
<http://www.library-karuizawa.jp/>

図書館の利用にあたっては公共交通機関の利用をお願いします。

【申し込み・問い合わせ】

中軽井沢図書館

☎41・0850